

平成二十二年度「花のまわりみち」

木村 里風子 選

俳句入選句

特選

(三句)

「特選一席」

普段着で来て花人にまぎれけり

中植紀子

(評) 花見に行くときに着る花衣がある。少し気取って花を見にいくところが普段着で普段の心で花と対面した作者の平常心、花見の人の中にまぎれると花人になるのである。

「特選二席」

花ばかり見てゐて夫とはぐれけり

辻 三千代

(評) 門から見える桜の美しさに既に夫は眼中になしというか。花ばかり見ていてとは作者が花に感動しているからである。

「特選三席」

銭造る工場の点り花の雨

亀井朝子

(評) 花のまわりみちの奥まったところに硬貨を作る原材料を熔解する工場がある。外は花見の人が溢れているが炉は休むことが出来ない。昼も夜も稼働していて暗くなると灯が点る。花と労働の句。

土手の草落花まみれでありしかな

斎藤 金二

(評) 咲いている木よりも散っている花びらで埋まった土手が美しい。落花まみれとは言い得て妙。

見せたくて夜桜に押す車椅子

住田 祐嗣

(評) どうしても桜を見せたい衝動は夜桜になった。車椅子を押し夜の花を愛でる。押す人も押される人も美しさに満足したことであろう。

携帯で撮る子の増えて八重桜

小川 博

(評) 携帯という措辞は俳句に馴染めないのだが捉える「もの」によって生きた。桜を撮ることで現実となっている。

放課後の青春過ごす花のみち

星井 菜月(つんく)

(評) 学校から帰りに寄った、さくらの花を見て我が青春を謳歌したのである。正に青春謳歌である。花のまわりみちのひとときは我が時間。

花冷や貨幣袋の重かりし

日田 富恵

(評) 資料館に入ると、外の陽気と違ってうすら寒い感じ、これが花冷か。資料の中に袋詰め貨幣が置いてあり重量はとあった。貨幣の重さにおどろく。

佳作

(十八句)

八重桜土より温み伝ひくる

野津訓子

ポケットに薬しのばす花見かな

中植勝己

走り根の瘤より桜新芽立つ

熊谷きよ彖

まわりみち元の桜へ戻りけり

吉岡昌文雅文

落花浮く小川の流ればなやぎて

湯野博子

遠足の列の膨らむ花吹雪

河村幸子

とぎれなき人とめどなく花吹雪

重西アツ子

雪洞の滲んで花の雨細し

山岡祥子

夕桜真珠のやうな雨となり

神波瑞江

鳥の来て造幣局の花散らす

五石満智子

楊貴妃てふ花のかぶさる車椅子

松原英明

犬抱いて花を見上ぐる男の子

谷口千恵子

普賢象見上げて空の青きかな

福島正則

琴の音のひびく楊貴妃桜かな

天野俊子

職退きし友と語らひ夕桜

篠崎順子

花の道手を引く母の今はなく

宮下ならう

今年また造幣局の桜かな

木村清生(青々)

パレードの少女のバトン花の径

長谷美白

選者吟

花筏流るる下に魚の影

木村里風子